

提出日：平成 21年3月22日

## 台湾メディア関連機関視察

韓 放（東北大学大学院情報科学研究科 博士課程後期 1年）

陳 怡如（東北大学大学院情報科学研究科 博士課程前期 2年）

調査・場所
平成 21 年度 台湾メディア関連機関視察 (場所：台湾台北市，桃園県，花蓮市)
日程
2009 年 3 月 16 日（月）～3 月 21 日（土）
参加者
関本英太郎（教授）・韓放（情報科学研究科博士課程後期 1 年）・陳怡如（情報科学研究科博士課程前期 2 年）
目的
台湾のメディア研究・教育機関（国立政治大学，世新大学，慈濟大学）および NGO 団体（媒体觀察教育基金会），メディア企業（公共電視台）を対象に，それぞれの展開状況に応じた「台湾社会における組織の役割」「メディア・リテラシー（以下略：ML）教育」「市民メディア」などをテーマとした学術交流や研修会を通して，台湾のメディア社会の発展・現状・課題を知ると同時に，今後情報リテラシープログラムを進めていく上での交流・提携機関の視察を図る。
内容および成果
<b>【3月17日（火）】</b> ・台北市立 萬芳国民小学校メディア・リテラシー教育授業見学 - 場所：台北市 萬芳国民小学校 - 見学内容 台北市文山区萬芳国民小学校は公立小学校である。幼稚園から小学校 6 年まで 41 のクラスで，学生が約 1000 名である。1998 年から，「台北市国民小学校情報教育重点發展学校」となり，「情報と教育の融合」，また「校務行政 E 化」を中心に情報教育を展開している。現在，情報リテラシー教育の一環として，ML 教育が取り込まれている。学校すべての教室に，パソコンとプロジェクター一台ずつ設置されており，授業の内容に合わせて機材を活用することができる。教務主任余秋玉は，美術や科学などの科目はパソコンとプロジェクターを使用し，映像を見せながら，学生の注意力と関心を高め，効果的に授業を進めるが，機材はあくまでも補助的な道具なので，それに依存することではなく，授業内容を豊かにするための道具として，機材を十分に活かすことが重要であると述べられていた。そして，情報が溢れている環境において，情報を整理し，評価し，理解しながら，身の回りの社会問題や価値観を認識することを目指した試み，NIE（Newspaper In Education（教育に新聞を））が実施されている。NIEとは，授業で新聞記事を教

材にして自主的で積極的なアプローチから学習を行い、情報の自己判断力を向上させることを目指すものである。その授業において、相互に意見を交換する場合、よく記事を読み込まなくてはならないため、読解力の促進も見込まれる。そして、複数の新聞を読み比べる事で新聞のウソや偏向報道を見抜く目を養うことはMLにも通じ、現代の子供にとってとても重要な意味合いを持つ。鄭智仁先生は6年生の保健体育科目を担当されている。私たちは6年生の保健体育の授業を見学した上で、授業にML教育の取り組みについて話し合った。鄭先生は一部の記事を学生と共に読みながら、情報を整理し、分析し、記事の背後に描かれている価値観・倫理・社会問題について討論をなされていた。鄭先生によると、毎週水曜日各科目の教師が集まり、交流会が行われるそうである。それぞれのメディア教育の現場における経験と具体的な教案について分かち合い、現場の教育経験を活かし、豊富な教案資源を開発されているそうである。教案などの教育資源が学校のウェブサイトに乗せてあり、毎週更新されている。



写真1 教室の様子



写真2 授業の様子

\* 写真は萬芳小学校のウェブサイトから引用したものである。

#### ・国立政治大学視察

- 場所：台北市 国立政治大学
- 視察内容

その後、台湾国立政治大学に移動した。新聞学院の媒体素養（ML）研究室の先生、学生と学術交流をし、これからの共同研究について意見も交換した。国立政治大学の媒体素養研究室で、小中学校でのML教育を積極的に取り組んでいる。1999年MLの取り組みを始め、今年まで10年間の歩みをまとめられた関尚仁主任と呉翠珍教授から、貴重な経験を聞くことができた。ML教育は国民教育の重要な一環として展開され、最終目標は学際的な研究活動と実践を通し、メディア情報を批判的に読み解く能力を持つ公民を育て、健全なメディア環境を促進することにある。具体的に、MLの教育内容は小学校1-3年の数学や社会の授業に、4-6年の保健と体育の授業に導入されている。一方で教師研修も重視されており、定期的に小中学校の先生向けに集中講義が行われ、教師用のハンドブックも出版された。台湾公共テレビ局の協力で、「別小看我」（甘く見ないで）というMLの映像テキストが作られ、番組として放送されている。その場で、台北市北新小学校の張嘉倫先生は小学生のインターネット利用と発信に関する教育経験を発表された。学生が既に持っているメディア利用習慣と経験を掌握した上で、情報発信の力、それに関す

る情報倫理などの問題を指導すべきだと彼女は発表で述べた。また、国立政治大学で ML は教養科目として取り組まれている。授業において、媒体素養研究室の院生代表が TA の役割とカリキュラム・デザイン、また評価方法について発表した。

### 【3月18日（水）】

#### ・世新大学，媒体観察教育基金会（以下略：媒観），メディア文化論研究室共同研修会

- 場所：台北 世新大学舎我楼 12 階 S1204 会議室
- 研修会内容

##### 1. 世新大学校内メディア教育・カリキュラム実施状況

世新大学は 1991 年に「マスメディアと社会」（1997 年、「マスコミュニケーションと社会」に改名）を学部一年の全学必修科目としたことをきっかけに ML カリキュラムを取り入れる。2001 年には全学教育にて、マスコミ学院以外の学生のための「メディア・リテラシー」カリキュラムが設置される。授業は、学生のクリティカル思考能力の向上を重視し、多様な視点からメディアメッセージを分析/読み解き、自身の能力を育成する（self-empowerment）ことに焦点を当てている。また、メディア業界や他校と提携したネット遠隔授業やカリキュラムのサイトを設置され、メディア技術を活用した授業が行われている。

##### 2. 教育部 2008 年度小中学校 ML 教育推進計画

世新大学が教育部支援のもと、2008 年 8 月から 2009 年 10 月までの期間に行っているプログラム。台湾の小中学校では、ML 教育は正式科目として授業に取り入れられていないものの、本プログラムは既存科目に ML を融合させる教材の提供を始め、小中学校教師の支援体制や ML を日常生活に定着させる理念などを特徴に行われている。当日午後参加した桃園県の「メディアの扉を開く」講座も本プログラムの一環として開催されたものである。

##### 3. 世新大学「大文山伝達と発展アーカイブ (<http://wenshan.shu.edu.tw/>)」

長期的に社会学研究を行ううえで、社会現象を包括的に考察し、第一手となる資料を蓄積する場所（locale）として社会学研究資料サイト「大文山アーカイブ」が設置され、主に伝達（マスコミュニケーション）関係の資料をメインに蓄積されている。また、世新大学が位置する大文山地区は、台湾社会の縮図ともいえる自然環境及び社会的背景を持ち、研究は主に地域との融合の上で進められた。しかし、情報資料の更新が継続的に行われていないという限界に直面しており、地域のオピニオンリーダーや記録担当者との定期的な提携をすべきという課題を抱えている。

##### 4. 「媒体観察教育基金会（以下略：媒観）」メディア・リテラシー教育推進状況

媒観は、ML 普及およびメディア社会に生きる市民のクリティカル思考能力向上、メディア環境の改善に力を尽くしている NGO 団体である。活動は雑誌や DVD の出版、市民大学における ML 講座・ワークショップの開催、良質児童番組の紹介・推奨、メディア企業への意見代弁、ボランティア（ML 推進者）の育成などを通して行われている。また、媒観はネットアーカイブ「公民行動影音記録資料庫 (<http://www.civilmedia.tw/>)」を立ち上げ、媒観の活動記録を残すだけでなく、主流メディアとは異なった視点で社会情勢を捉えたり、軽視されがちな地域社会やマイノリティのニュースを取り上げたりするなど、様々な市民が多角的に意見を伝え、情報を共有でき

る手段を提供している。

#### 5. 東北大学メディア文化論研究室の研究・取り組み紹介

日本でも様々なメディアの問題を背景に ML の重要性が重視されるようになり、メディア文化論研究室でも 2001 年 12 月に「メディア・リテラシー・プロジェクト (MLP)」を設立した。今回は主に 2007 年と 2008 年に市民センター開催された「小学生映像制作ワークショップ」を用いて ML 教育の推進状況およびケーブルテレビを利用した市民の情報発信 (市民メディア) の実例を紹介した。一方で、「普及が難しい」「映像を用いた教育への理解の不十分」「社会的・政治的課題のアレルギー反応」「教育人材の不足」などといった研究室が仙台市で ML 教育を進める上で考察された課題もまとめた。

#### 6. 質疑応答

ML 教育の重要性は一般的に認識されているが、「教育人材の不足」や「教える術が分からない」などといった問題がよく伺われる。一方で、世新大学は校内だけでなく、他の教育機関、更には政府機関、市民団体、メディア企業と提携し、ML 教育を推進しているだけでなく、マスコミ学部内で 25 人もの ML 教育の教育人材が育成され、台湾各地で ML 講座を開講している。世新大学新聞学部の黄聿清助教授は、多くの教師は ML の重要性を認識しつつも十分に理解できていないがゆえに実際の教育行動に移せない現状を認めつつも、「マスコミ学院の教師、学生、院生にとって ML は基本スキルだということを利用し、内部から徐々に広げていくことで少しでも教育人材を増やし、ML 教育に対する理解を外部にも深めてもらうよう試みている」と話している。



写真 3 世新大学で MLP について報告

#### ・小中学校メディア・リテラシー教育推進計画 巡回講座「メディアの扉を開く」

- 主催：世新大学「教育部 2008 年度小中学校 ML 教育推進計画」
- 共催：桃園县政府教育処
- 講師：世新大学新聞学部講師 余陽洲先生
- 開催対象：桃園県小中学校校長
- 場所：桃園県桃園市 大有小学校
- 講座内容

昨年、台湾教育部は小中学校九年一貫教育授業綱領の一部を修正し、2011 年より ML 教育を教科書に取り入れる予定を発表している。しかし、教育現場の教師の多くはこの動きを新たな取り組みと捉え、敬遠しがちな傾向が窺われる。講師余陽洲先生は、現在使用されている小中学校の教科書 (今回は小学 4 年と 6 年の各科目から内容を抽出) の内容や、映像・新聞記事などのメディアテキストを用いて、教育現場と (メディア) 理論のギャップ・差異を埋めることを目的に本講座を進めていった。

### 1. 既存の小学校教材に見られる情報教育・ML教育との係わり

現に小学校で使用されている教科書の至る所に「インターネット」「携帯電話」「著作権」など、メディアや情報社会におけるキーワードが見られる。ML（媒体識読，媒体素養）を辞書で引くと、「識：調べて，探究し，判読する」「讀：読む，思考，推考，伝える」との意味が出てくるが，教科書を見ても，「広告の『信憑性について』十分に考える」，「詳細を判別せよ」，「大地を『読み解く』」，「音楽のリズムは『聞いて』『見る』（感じる）ものである」などと，こうした概念を利用した内容構成となっている。つまり，ML教育はまったく斬新な取り組みではなく，ごく日常的な知識・スキルをメディアに当てはめて行っただけのことであり，如何に教育システムを構築・展開し，既存の科目の中に組み込んで学生にわかるように教えるかが課題となる。

### 2. 日常生活からメディア，MLを考える

#### (1) 広告（メディア）に形成される日常社会

「CMがそうだったから」という理由から，「作業・仕事の効率向上を求める工事現場労働者向けの栄養ドリンク」「女性用のサプリには不適切」とのイメージが参加者の間にある”ウィスピードリンク”を事例に挙げ，広告のイメージ・ステレオタイプ形成について説明がなされた。同商品の26年前のCMは「貧血や体の弱い人のための飲み物という印象を与える作り」になっており，商品自体は同じにもかかわらず，商品表示や宣伝方式が異なっただけで消費者の印象がまったく違って来る典型的な事例となった。

#### (2) メディアに再現されたニュース報道

普段無意識に見ているニュース報道の多くは，制作者の意図によってステレオタイプを伴ったり，必要以上にハイライトされたり，センセーショナルに面白おかしく伝得られたりされている。また，「桃園県地方文化と観光に関するフォーラム」と題された一見イベントに関する情報に見えた記事は実は20万円（約5，60万円）支払って新聞に掲載されている「広告」であった。しかし，人々は「ニュース・新聞は報道の責任を持って真実を伝えているから，公共性がある情報だから」などといった先入意識を持っているがゆえにこうした現状にほとんど気づいていない。

### 3. ML教育の必要性和展開の可能性

メディア「批判」というのは，メディアを悪く考えるのではなく，善悪の判断をしたり，様々な考えを理解した上で，論証を行う意味も含まれる。子供だけでなく，大人もメディアに接し，メディアの影響を受けることがあるため，MLは年齢・性別・背景に限らず必要とされる。既存の教材にはすでにML教育に関する概念・用語が用いられ，ただ「ML教育」として定義付けて説明していないだけで，今後の教師の役割は手元にある素材・資料を如何に授業に組み込んで活用するかを考えることにある。いずれにしろ，まずは行動に移すことが第一歩となる。実際に地域やクラスの身近な出来事を題材にデジタルカメラやホームビデオを使って映像を発信したり，学級新聞を作成している学校や生徒も数多く存在する。

情報化社会では，情報教育・ML教育は生活や教育現場の延長線上にあり，それを行うための環境はすでに整っていると見える。

## 【3月19日（木）】

### ・慈済大学 講演，学術交流会

- 場所：花蓮市 慈済大学
- 活動内容

#### 1. 講演：メディア文化論研究室のメディア教育及びMLの推進における取組

東北大学全学教育「メディア論」において、活字テキスト、写真、映像など様々なメディアの特性について理解し、考えることを取り入れた授業内容の紹介から、日本でMLの重要性が認識され始めた背景や、2001年研究室が立ち上げたMLPの活動内容などについての紹介がなされた。講演後、学生との間で次の質疑応答が交わされた。

(1)

Q：一昨年流行語大賞を取った「そんなの関係ない」などのように、日本のバラエティ番組ではその時点で流行している様々な事柄が取り上げ、面白おかしく作成されているが、その様子についてはどう思われるか？

A：視聴者を楽しませるのもテレビの役目である。面白い内容はどう見ても面白く、楽しみながら面白おかしく作られている番組を視聴することは何の問題もない。ただ、楽しむ一方で、それは局の理念・価値観を踏まえたうえで「作られたもの」だと意識することがMLを備えるべき視聴者の責任ともいえる。ただ、何かが大いに流行ったとき、ほぼすべての局が同じような題材を取り上げ、番組内容が単一化してしまう傾向があることも意識すべき問題点といえる。

(2)

Q：メディア文化論研究室では市民メディアを推進し、地域のケーブルテレビで自作映像を発信しているが、このような取り組みは大手メディア企業やプロの記者などに何らかの影響またはインパクトを与えているか？

A：日本のマスメディアは、自分たちに向けられた批判を前にますます萎縮し、課題と向き合えない現状にあり、市民が作成した作品を受け入れるような姿勢が整っていない。また、ほとんどすべての局は時間の制限や番組の質に対する規定や意識があるのに対し、市民記者は伝えたい思いが先行し、時間は軽視されたり、作品内容の質もプロの番組に比べるとやや劣る部分があるように思われ、大手メディア企業からすれば市民メディア作品は「アマチュア作品」としか考えられていないのも事実である。残念ながら、市民のメッセージや伝えたい思いをきちんと汲み取ってくれるような局はほとんどないのが現状である。

#### 2. 地域と提携した慈済大学の情報発信

慈済大学マスコミ学部は、地元の花蓮県吉安郷南華村と提携し、地域の歴史文化や情報を記事またはドキュメンタリー形式で記録し、公共電台の市民ネットニュースサイト「People Post (Peopo)」を通して発信している。また、作成された記事は活字バージョンも展開されており、地元のお宮で展示されている。

【3月20日（金）】

・媒体観察教育基金会 業務紹介・ラジオ番組「メディアウォッチステーション（媒体観察站）」収録

- 場所：台北 媒体観察教育基金会，教育ラジオ局

- 活動内容

媒観は 1999 年成立され、台湾のメディア NGO として活躍している。学校教育よりもより広い意味で市民教育に力を入れている。市民のメディア活動を通し、溢れている情報を批判的に読み解き、市民自身が積極的に表現していく能力が育つことを彼等は目指している。「媒観」を視察し、台湾と日本の市民メディアについて交流した後、台湾国立教育ラジオ局で「媒体観察駅」という「媒観」のラジオ番組でインタビュー



写真4 台湾国立教育ラジオ局でのインタビュー

を受け、関本英太郎教授は日本の ML の発展、また東北大学での取り組みについて述べていた。

・公共電視台（台湾 公共テレビ局）視察

- 場所：台北 公共電視台

- 視察内容

台湾で公共電視台は日本の NHK と同じような位置づけである。市民社会を推進し、多様な文化が共に発展させるというミッションの下に、国立政治大学の媒体素養研究室と連携し、子供向けの ML 番組「甘く見ないで（別小看我）」を製作し、放送している。この番組はインターネット上でも自由に見ることができる。それから、PeoPo (People Post) という市民メディアを見学し、交流が行なわれた。PeoPo は市民記者を育成し、活躍する場を提供している。情報社会において、多様な視点を持つことと市民が発信力を身につけることが重要である。私たちは、日本と台湾において、市民メディアの現状とこれからの展開について論議した。情報社会において、市民が情報を批判的に整理し、理解し、さらに自ら発信していく力が期待されているということを相互に確認した。



写真5 PeoPo 市民メディアの看板